



2013年8月14日放送

頻用処方解説 桂枝加芍薬湯

東邦大学医療センター大森病院 東洋医学科 **奈良 和彦**

桂枝加芍薬湯は、腹部の膨満、腹痛、渋り腹、下痢便秘を繰り返すなど過敏性腸症候群に類した消化器症状に用いられる方剤で、腹部の過度の緊張を緩和して痛みを止め、便通を改善する目的に用いられます。桂皮 4、芍薬 6、大棗 4、生姜 1、甘草 2 から構成され、その名称のとおり、桂枝湯の芍薬を増量したものです。

出典は、傷寒論です。傷寒論は、傷寒の治療について記されています。そこに記されている傷寒は急性発熱性疾患なのですが、現代医学の何病にあたるか、いまだに分かっていません。しかし、傷寒論の方剤は、病名に関係なく、適応症状が一致すれば、応用が可能であるのが特徴です。

さらに、この傷寒論には、治療がうまくいかなかった、もしくは間違えて、病気をこじらせてしまった時の対応法も多く記載されています。そのことから慢性疾患にも応用可能な多様な方剤が収載されています。今回お話する、桂枝加芍薬湯も、そのような方剤のひとつです。

傷寒論における桂枝加芍薬湯の条文には、太陽病という傷寒の初期段階に、下剤をつかった不適切な治療を行って、腹部膨満、腹痛が生じたときには桂枝加芍薬湯を用いることが指示されています。さらに、便秘して圧痛がある場合には桂枝加大黄湯を用いることが付けくわえられています。

この傷寒の太陽病とは、傷寒すなわち急性発熱性疾患の初期にみられる症候です。外来の病原因子が体表にあって、発熱、悪寒、関節の痛みなどをきたしている状態です。普通

の感冒症状やインフルエンザなどの初期にも太陽病の症状は多くみられます。この太陽病は、本来、発汗させることによって治療を行うべきなのですが、誤って、これに下剤によって便を下す治療を行ってしまった。このために病気のステージが体表から消化器に移行して、腹部の膨満や疼痛が生じた状態となった。この時に桂枝加芍薬湯を用いることが指示されています。また便秘して圧痛がある場合には、桂枝加大黄湯を用いるとされています。この桂枝加大黄湯は、桂枝加芍薬湯に大黄を加えたものと解釈されており、今日では桂枝加芍薬大黄湯の名称が一般的です。これもエキス剤で使用することが可能です。

さて、桂枝加芍薬湯の基本的な適応は、下剤による誤治療の有無に関係なく、腹部膨満、腹痛、渋り腹、便秘下痢を繰り返すなどの過敏性腸症候群に類した消化器症状です。

お腹が少し冷えていて、胃腸の機能および全身の体力が低下している状態。しかし一部の筋肉や消化管は不適切な緊張を示しており、これが腹部膨満や腹痛、排便の不調をきたしている、というものが桂枝加芍薬湯の適応症です。典型的な腹部の所見は、膨満して腹直筋が緊張し、著しいときには2本棒のように触れるものです。

なお、このような腹部膨満、腹痛、排便障害が見られて、さらにお腹の冷え、消化機能の低下、全身の体力低下が著しい場合には、桂枝加芍薬湯に膠飴を加えた小建中湯の適応となります。膠飴とは米飴のことで、冷えて機能の低下した腹部、胃腸を温めかつ機能をたかめ、全身の体力低下を改善する働きがあります。名称も建中湯となっており、中すなわち胃腸の機能を建て直して全身の体力低下を改善するという方剤です。

一方で、桂枝加芍薬湯の適応症に似た状態で特に便秘や、渋り腹が問題となる場合には先ほどの傷寒論の条文にもありました桂枝加芍薬大黄湯の適応を考えます。下剤の多くは、お腹を冷やす作用を持ち、体力低下や胃腸虚弱のある人に用いると腹痛や下痢などが起こりやすい傾向にあります。しかし、この桂枝加芍薬大黄湯は、桂枝加芍薬湯がベースとなっているため、体力低下や胃腸機能の低下のある人に応用しやすいのが特徴です。

また、渋り腹、残便感が顕著でかつ、熱を帯びていないタイプの下痢に応用されることもあります。

桂枝加芍薬湯の鑑別処方としては、上記の小建中湯、桂枝加芍薬大黄湯の他には、よく真武湯が挙げられます。真武湯は、腹部・消化器および下半身の冷えが強く、そのことによって消化機能および水の代謝機能が低下している状態が適応症となります。桂枝加芍薬湯と同様に腹痛が見られますが、冷えが顕著で、下痢、浮腫、頻尿（または尿量減少）などを伴う時に用いられます。

ところで桂枝加芍薬湯のもとの方剤である桂枝湯は発熱悪寒、関節痛がして汗がジトジトと出るような、虚弱な人の太陽病を治療する方剤です。桂枝湯の構成は、桂枝、芍薬、大棗、生姜、甘草です。ニッキ、しょうが、なつめ、甘草など、薬というよりは食品としてなじみが深い生薬から構成されています。

伝統的な考え方では、桂枝は気を暖め、体表の気の巡りを良くし発汗を促して、体表の

病原因子すなわち邪を除きます。芍薬は、滋養を与えると同時に過度の発汗を防止します。桂枝と芍薬の組み合わせで、体表を温め、気血めぐりを良くし、発汗を適正化して、外来の病原因子にたいする防衛力を高めます。

生姜は桂枝の体を温める働きを助け、大棗は芍薬の滋養を与える働きを助けますが、このふたつは胃腸に働きかける生薬で、消化機能を助けることで体表の機能を内側から補助しているとも言えます。甘草は、胃腸を補うと同時に、諸薬を調和する作用を持ちます。

さて、桂枝加芍薬湯は、感冒治療薬である桂枝湯の芍薬が増えることで、消化器症状の方剤となっている所が特徴的ですが、逆に桂枝湯自体が胃腸に働きかける感冒薬とも言えます。桂枝加芍薬湯で増量されている芍薬は古代の生薬に関する書物である神農本草経に、すでに腹痛を治療する効果が明記されています。

芍薬には筋肉の緊張を緩めて、痛みを止める効果があるとされており、甘草と合せる事でその効果が増強されます。芍薬と甘草の二味からなる芍薬甘草湯は、こむら返りに即効性があることで有名です。桂枝加芍薬湯の止痛効果も芍薬と甘草の組み合わせに負うところが大きいと言えます。

桂枝加芍薬湯の基本的な適応は、腹部膨満、腹痛、渋り腹、便秘・下痢の繰り返しなどですが、現在では消化器症状以外の症状に対しても用いられています。昭和の著名な漢方家である相見三郎先生は、腹部所見を参考にして桂枝加芍薬湯を小柴胡湯と合せて用いて、多数のてんかんを治療したことで知られています。また、この組み合わせは、てんかん以外にも、夜尿症や三叉神経痛にも用いられています。

相見先生は、桂枝加芍薬湯の腹症を小腹拘急、腹直筋拘攣、小柴胡湯の腹症を胸脇苦満として、これら腹症によって、てんかんに桂枝加芍薬湯合小柴胡湯を処方して、400例にのぼる、てんかん患者を全治もしくは軽快したことを報告しています。現在では、抗てんかん薬の補助療法として用いられています。なお、てんかん治療とのアナロジーより、この組み合わせで三叉神経痛に用いられている他、脳卒中後遺症の視床痛にも試みられています。

桂枝加芍薬湯にもどります。桂枝加芍薬湯の基本的な適応は、腹痛、下痢・便秘の繰り返しなど過敏性腸症候群様の症状です。胃腸の機能・全身の体力の低下があって、なおかつ腹部の筋肉や消化管の過度の緊張がある。これが腹部膨満や腹痛、排便障害をもたらしている状態です。桂枝加芍薬湯は桂枝湯の芍薬を増量したものでした。桂枝湯は、体力が低下した人の感冒にたいして、胃腸の機能をたかめて抵抗力をつけ、体表を温め、めぐりを良くし、発汗を適正化することで治療するという方剤です。桂枝湯は胃腸の機能をたかめ、体を温め、めぐりを良くする機能を持つことから、生薬を追加して、様々な慢性的な症状の治療に用いられています。桂枝加芍薬湯は、そのひとつであり鎮痙止痛効果のある芍薬が追加されています。